

認識的用法の *wer weiß*⁽¹⁾

宮 下 博 幸

1. はじめに

本稿では現代ドイツ語の *wer weiß* という形式に注目して考察してみたい。この形式は「誰」を表す疑問代名詞の主格 *wer* と「知る」を表す動詞 *wissen* の結合であることから、構成要素の意味から全体の意味が構成されるという構成性の原理 (**Kompositionalitätsprinzip**) によって予測される、疑問の意味を持つ用法を有することが当然予想される。このような用法は次の例に確認できる⁽²⁾。

(1) a. Die Kripo fragt: **Wer weiß**, wo sich Schmidt zur Zeit aufhält?

(Berliner Morgenpost, 03.11.1998)

「刑事警察は尋ねた：誰がシュミットが今どこにいるのかを知っているのだ？」

b. Er habe schon zig mal gefragt: “Wer ist das? **Wer weiß** was?”

Keiner habe eine Antwort parat. (Frankfurter Rundschau, 24. 05. 1997)

-
- (1) 本稿は 2007 年の日本独文学会秋季研究発表会（大阪市立大学）での同名の口頭発表をもとにしたものである。なお本稿では文学テキストのコーパスデータを新たに加えることで、発表時よりデータを倍程度に拡充して分析を行っている。
- (2) このような例を日本語に訳す際には、「シュミットが今どこにいるのかを知っているのは誰なのだ」「何かを知っているのは誰なのか」のように「誰」を焦点化するような構文にする方がすわりが良いようであるが、ここでは原文に合わせて訳している。この相違は興味深いものであるが、ここではそれを指摘するのみにとどめる。

「彼はすでに何十回も尋ねた：あれは誰なのか？ 誰が何かを知っているのか？ 誰も答えられる者はいなかった」

これらの例では **wer weiß** により、「誰が知っているのか（知っているのは誰なのか）」という疑問が表明されている。しかし実際の用例を観察すると、**wer weiß** にはこのような文字通りの疑問文としての使用よりも、(2)に見られるような修辞疑問的用法がより多く観察される。

- (2) a. Oft, so weiß der promovierte Bauingenieur zu berichten, sind Autofahrer von der Höhe dieser Kosten überrascht. “**Wer weiß** schon, daß eine Autobahn bis zu 80 Zentimeter dick ist und auf was beim Bau alles zu achten ist?” (Frankfurter Rundschau, 24. 01. 1997)

「博士号を有するその建築技師が報告するように、自動車運転者はしばしばこの費用の高さに驚く。『アウトバーンが80センチもの厚みを持っていて、建設の際にどんな点に注意すべきかを誰が知っているでしょう?』」

- b. »Wir sehen uns das Auto an«, erklärte der Hauptkommissar den Uniformierten. »Sie bleiben bitte hier, **wer weiß**, was für Überraschungen dort noch auf uns warten.« (Gibert, Matthias P.: Kammerflimmern. Meßkirch, 25. 03. 2011)

「『我々はその車を見てみましょう』警部主任は警官たちに説明した。『あなた方はここにいてください、どんな驚きが我々を待っているかわかりません』」

ここでは **wer weiß** が反語的に用いられている。さらに、**wer weiß** には以上のような用法と並んで、次のような用例が見られる。

- (3) a. “Wir sind uns ganz sicher, daß wir gewinnen, da Mainz einfach spielerisch nicht gut genug ist, um auf unserer Bahn zu bestehen”, berichtet Minka Esser. Und **wer weiß**, vielleicht wird dies ja der Auftakt zu einer neuen Siegesserie. (Frankfurter Rundschau, 19. 02. 1997)

「『我々は勝利することを確信している。というのもマインツは我々の道を要求するに足る試合をしていないからだ』とミンカ・エッサーは述べている。そしてひょっとするとこれが新たな連続勝利の始まりとなるかもしれない」

- b. Nach 35 Jahren ist für jedes Atomkraftwerk Schluß. ... **Wer weiß**, am Ende schalten die Konzerne die Meiler von sich aus eher ab, weil sie sich betriebswirtschaftlich nicht mehr rechnen. (Berliner Morgenpost, 02. 07. 1999)

「35年後にどの原子力発電所も終わりを迎える。… ひょっとすると最後にはコンツェルンが、経営的に元が取れないという理由で自ら原子力発電所を停止するかもしれない」

(3 a) では **wer weiß** が話法詞の *vielleicht* と共に「ことによれば、ひょっとすると」のような話し手（この場合は書き手）の心的態度を表す機能を担っていると解釈できる。また (3 b) では **wer weiß** が単独で用いられ、同様の機能で使われていると解釈できる。このような話し手・書き手の推量的な判断を担う **wer weiß** を、本稿では「認識的 (epistemisch) 用法」の **wer weiß** と呼びたい。この用法は事例において比較的よく観察されるものの、これまでの辞書記述などにおいて、ほとんど扱われていないようである。本稿ではこの認識的用法ならびに他の用法の **wer weiß** の特徴を、現代ドイツ語のコーパスデータに基づいて明らかにし、また特に認識的用法に関して、日本語との比較を交えつつ、認識的な意味への拡大の背後にあるプロセスの考察を行いたい。

2. 辞書における *wer weiß* の記述

管見の限りでは、これまで *wer weiß* を主たる対象とした研究文献はなく、この表現についての情報が得られる資料は辞書の記載のみである。ここではまず現代ドイツ語の複数の辞書の記述をまとめてみたい。

まずドイツ語学習者にとって身近な *Langenscheidt Großwörterbuch* (Götz 2015) においては、この表現についての特段の記述はない。それに対し Wahrig (1997), Klappenbach/Steinitz (1977), Kempcke (2000), Paul (1992), Dudenredaktion (1999) は、記述の程度は異なるものの、*wissen* の項で *wer weiß* を取り上げている。

Klappenbach/Steinitz (1977: 4371) や Wahrig (1997: 1373) は (2) で見た反語的な用法を挙げ、否定表現を用いてパラフレーズしている⁽³⁾。例えば Klappenbach/Steinitz は *wer weiß* を「知らない、誰もそれについて知識がない (*es ist unbekannt, niemand hat Kenntnis davon*)」とパラフレーズしており、Wahrig は *wer weiß, was alles noch kommt* という例を挙げ、この *wer weiß* を「誰も言えない (*niemand kann sagen*)」と言い換えている。このようなパラフレーズが許されることから、*wer weiß* はすでに一種の否定表現として慣習化していると考えられることができる。

また多くの辞書で取り上げられているのが、「強調的用法」と呼べるような用法である。この用法についての記述は辞書によって様々であるが、例えば Klappenbach/Steinitz (1977: 4371) は *wer weiß wie* を話し言葉的として「とても、特に (*sehr, besonders*)」とパラフレーズし、*wir hatten uns das wer weiß wie schön vorgestellt, ich bin nicht wer weiß wie reich* といった例を挙げている。Wahrig (1997: 1373) は *er denkt, er sei wer weiß wie*

(3) Kempcke (2000: 1229) には否定表現としてのパラフレーズは見られず、*wer weiß, ob er das schafft* という例が修辞疑問 (*rhetorische Frage*) として扱われている。

klug という例を挙げ、*sehr, ungemein klug* と説明している。Kempcke (2000: 1229) は *wissen* の項において *wer weiß wie* を一項目として取り上げ、それが「感情的 (emot.)」表現であるとし、「何とも (*wie sehr*)」というパラフレーズとともに *wer weiß wie habe ich mir das gewünscht* という例を挙げている。Dudenredaktion (1999: 4538) はこのような用法を「強調的で慣用的な挿入句で (*in verstärkenden, floskelhaften Einschüben*)」という箇所にまとめ、*so tun, als ob die Angelegenheit wer weiß wie wichtig sei* という例を挙げて当該箇所を「あたかも非常に (*als ob sie äußerst*)」とパラフレーズしている。以上の例はどれも *wer weiß wie* が単独の、もしくは形容詞を修飾する副詞と解釈されるような用法であったが、Dudenredaktion はさらに同一の項で *dies und noch wer weiß was alles hat er erzählt* という例を挙げ、*und noch wer weiß was alles* を「さらに考えられるものすべて (*u. noch alles Mögliche*)」と説明している。このような例は他に Paul (1992: 1052) にも見られる。Paul では *man kann mir wer weiß was bieten* という例の *wer weiß was* が「さらにずっと多く (*noch so viel*)」と説明されている。*wer weiß wie* と異なり、*wer weiß was* は統語的には副詞的とは見なされないであろうが、どちらも程度を強調しているという点で共通点が見られる。そのためここでは Dudenredaktion のようにどちらも「強調的用法」と見なすことにしたい。

さらにほぼ Klappenbach/Steinitz (1977: 4371) のみに記載されている用法として「不定的用法」と名付けうる用法がある。Klappenbach/Steinitz は *er lebt wer weiß wo an der See ; sie sucht wer weiß wen ; er hat wer weiß was gesagt* といった例を挙げ、それぞれ不定を表す *irgend-* を用いて「どこか (*irgendwo*)」「誰かを (*irgendwen*)」「何か (*irgend etw.*)」とパラフレーズしている⁽⁴⁾。

(4) この例に現れる *wer weiß was* という形式は上の「強調的用法」でも扱われたものであった。したがってこの形式には「強調的用法」と「不定的用法」の二つの解釈がありうるということになる。これについては以下で再び触れる。

以上が現代ドイツ語の主要な辞書における記述である。ここから *wer weiß* という表現がさまざまな形で拡張的に使用されていることがわかる。以上をまとめるなら、*wer weiß* には「疑問用法」の他に、「修辞疑問・否定用法」「強調的用法」「不定的用法」があると言える。このうち本来の用法は「疑問用法」であろうが、そこから他の用法がどのような経路で生じてきたのかは不明である。また、同時に以上で取り上げた辞書では、上の(3)で見た「認識的用法」について、全く記述が見られないことがわかる。このように *wer weiß* という表現に関してはなお不明な点が多く、その特徴を包括的に分析する必要がある。

以上の現代ドイツ語の辞書においては認識的用法に触れたものが見当たらなかったが、ドイツ語の語の歴史的発展を記述する Grimm/Grimm (1984:30, 769) は、*wer weiß* の認識的用法に相当する以下の例を挙げている。

- (4) a. und gedacht im ain jeder : wer waiszt, got gibt meiner tochter
das glück als bald als ainer anderen Fortunatus 64 ndr.
- b. und gedacht heimlich in seinem hertzen, wer weist, das pferd
möcht nur noch wol eben kommen WILH. SALTZMAN Octavian (1548) G 3 b
- c. wer weisz, ist er nicht gar schon an der thurmthüre! GER-
STENBERG Ugolino 235, 5
- d. wer weisz, ist das die letzt westen, die ich mach! O. LUDWIG
ges. schr. 2, 329

Grimm/Grimm はこれらの例の説明として、こういった場合、*wer weiß* により「陳述が推量の性質を帯びる。我々の *vielleicht* と置き換え可能であろう (die aussage erhält den charakter einer vermutung. unser *vielleicht* könnte an die stelle treten)」と述べている。しかし「我々の *vielleicht* と置き換え可能であろう」という記述からは、現代ドイツ語ではこのような使われ方

が見られないような印象を受ける。また本稿の関心である、この用法への拡張の背景についても触れられていない。

なお *wer weiß* の英語の対応表現である *who knows* に関しては、近年のコーパス言語学の成果に基づいて書かれた大部の英文法書である、*Longman Grammar of Spoken and Written English* (Biber et al. 1999 : 865) において言及が見られる。そこでは以下の例が挙げられ、*who knows* が疑いもしくは可能性を表すためにしばしば挿入される、定動詞を含むスタンス副詞句 (*stance adverbial*)⁽⁵⁾ として扱われている。これは本稿の認知的用法の *wer weiß* に相当するものである。

- (5) a. Apart from anything else, you'll feel more relaxed if you do.
And **who knows**, he might pick up on that, and relax himself.
(FICT)
- b. They fantasise that if they had parents like yours, they'd sit on their backsides and eat chocolates, and hell, **who knows**, maybe they resent you because you don't. (FICT)

しかし *who knows* という表現の本来の機能と、スタンス副詞としての機能が互いにどのように関連するのかに関する考察は行われていない。

3. *wer weiß* のコーパスデータによる分析

以上から *wer weiß* の諸用法、とりわけこれまで現代ドイツ語の辞書に記載が見られない認知的用法に関しては、さらに詳しく分析する必要があることが明らかとなった。本稿では電子コーパスからこの形式を含むデータを収集し

(5) スタンス副詞句とは主に節または節の一部の内容やスタイルに関してコメントする機能を持つ副詞句で、一語からなる副詞の *apparently* や *to my surprise* のような前置詞句もこれに含まれる (Biber et al. 2000 : 853)。

分析を行う。

3.1 使用コーパスと用例数

用例はマンハイムドイツ語研究所の電子コーパス COSMASII のうち、文学作品のコーパスである *Belletristik des 20. und 21. Jahrhunderts: Diverse Schriftsteller* と、*Berliner Morgenpost 1998-1999*, *Frankfurter Rundschau 1997* の二つの新聞コーパスを用い、これらのコーパスから *wer weiß* という結合を含む用例を抽出して分析した。それぞれのコーパスから収集した用例数は表 1 の通りである。以下ではこれらのデータを分析の基礎とする。

表 1 調査コーパスにおける *wer weiß* の用例数

コーパス	用例数
<i>Belletristik des 20. und 21. Jahrhunderts</i>	458 (55.3%)
<i>Berliner Morgenpost 1998-1999</i>	124 (15.0%)
<i>Frankfurter Rundschau 1997</i>	246 (29.7%)
計	828 (100.0%)

3.2 *wer weiß* のコーパスデータに基づく分析

分析に際しては 2. で見た *wer weiß* の用法のタイプに依拠しつつ、コーパスの実例を観察してみたい。まず疑問用法の例を挙げる。

- (6) a. Der Mann zuckte mit den Schultern. „Vieles ist verboten. **Wer weiß**, warum?“ „Weil irgendein Idiot das so beschlossen hat!“, antwortete Ruhna heftig. (Bhattacharyya, Barin: *Das einsame Land. Föritz*, 2001 [S.146])

「その男性は肩をすくめた。『多くのことが禁止になっています。なぜか誰かわかりますか?』『どこかの馬鹿がそう決めたからよ!』とルーナは強い調子で答えた」

- b. Auch da fragte der Lehrer: »**Wer weiß** es«, und einer wußte es

und war der Sieger. (Bichsel, Peter : Im Gegenteil. Frankfurt a.M., 1999 [S.96])

「そこでもその教師は質問した。『誰か知っているかな』生徒の一人はそれを知っており、勝者となった」

このような疑問用法の生起は全用例中できわめて少なく、20例(2.4%)のみであった。この用法が占める割合は文学作品、新聞のコーパスともほぼ同様であった。この用法が観察されにくいのは、ある事柄を知っている者を問うことが、限定された特定の場面、例えば学校や何らかの事件の場合を除いてそれほど多くないことと関係があるものと考えられる。

それに対して、以下の例のような修辭疑問用法は用例中に非常に多く見られ、*wer weiß* の用例の 65.2% がこの用法と解釈されるものであった。

(7) a. „Wir sollten am Stall vorbei, und uns ein Seil mitnehmen! **Wer weiß**, was in der Zwischenzeit geschehen ist?“ (Planert, Angela : Seleno. Föritz, 2006 [S.268])

「我々は家畜小屋によって縄を持っていくと言われていたんだ！その間に何がおこったか誰が知るか？」

b. „Ich habe Angst. **Wer weiß**, was uns noch alles bevorsteht. ...“ (Berliner Morgenpost, 17. 11. 1998)

「私は不安です。どんなことが我々に迫っているかわからないので」

このような例には、(7 a) のように修辭疑問と解釈されるものと、いくつかの辞書に記載されていたように、すでに修辭疑問的な意味合いが希薄化して、否定表現のように解釈される (7 b) のようなものが見られた⁽⁶⁾。このような解

(6) しかし用例では (7 b) のように解釈されるものがほとんどである。これはこのような用法のほとんどの例が、疑問符ではなくピリオドもしくは感嘆符で終わっていることにも見て取れる。

釈の拡張は、修辭疑問の特徴に起因していると言える。Schwitalla (1984 : 136) は修辭疑問の特徴として、答えが必要でないことと、修辭疑問による質問の命題と反対のことが主張されることを挙げている。また Bußmann (1990 : 650 f.) はさらに肯定の補足疑問文が修辭疑問として使用される際には、否定の存在叙述が行われるとし、*Wo hat man schon seine Ruhe?* 「人はどこで平穩を得られるのか」が *Nirgends hat man seine Ruhe.* 「人が平穩を得られるところはどこにもない」と解釈される例を挙げている。*wer weiß* の否定表現としての解釈の拡張も、このような修辭疑問の一般的な解釈傾向から説明可能である。例えば「誰が知るか」からは、同様に「知る人は誰もいない」が導かれる。*wer weiß* においてはこのような解釈が慣習化し、それ自体がすでに否定表現の一種になっていると考えられる。

次に上で見た強調的用法の実例を見てみたい。

- (8) a. Die Sonne ist untergegangen **wer weiß** wie lange schon. Die Freunde sitzen im Finstern. Die Geige schweigt. (Frey, Eleonore : *Muster aus Hans. Graz, Österreich*, 2009)

「太陽が沈んでからももうずっと長いことたっていた。友人たちが暗闇に座っている。バイオリンは沈黙している」

- b. »Was soll das heißen?« »Das sind keine standardisierten Abkürzungen. Kann für **wer weiß** was stehen.« (Schmoe, Friederike : *Pfeilgift. Meßkirch*, 28. 03. 2011)

「『これはどういう意味だろう?』『それは標準的でない略語だよ。あらゆることを表す可能性がある』」

- c. Das Gesicht von Mayer IV wurde in die steinharte Erde gedrückt und Beck spürte die schreckliche Enttäuschung, dass die Roten **wer weiß** wen befreien, aber nicht sie, die Plennys, die Kriegsgefangenen, nicht sie. (Balàka, Bettina : *Eisflüstern. Graz, Österreich*, 2006)

「マイヤー 4 世の顔は石のように固い地面に押し付けられ、ベックはひどい失望を感じた。赤軍はあらゆる人を解放したが、彼らは解放しなかった、プレニー家の人々、戦争捕虜、だが彼らは解放しなかったのだ」

このような例は全用例中の 4.2% であった。このタイプの用例では (8 a) のように *wer weiß wie* が後続する形容詞や副詞の程度を強調するもの、(8 b) のように *wer weiß was* が全体で「あらゆるもの・こと」のように「もの・こと」の数量を強調するもの、さらに (8 c) のように *wer weiß wen* で人の数を強調し「あらゆる人」を表すものが見られた。

次に不定的用法を見てみたい。

- (9) a. »Schade, dass du für morgen schon ein Zimmer im Kempinski Berlin, im Regency London oder **wer weiß** wo, gebucht hast.« (Schoof, Renate: In ganz naher Ferne. Oberhausen, 2003 [S.144])

「君が明日もうベルリンのケンピンスキー、ロンドンのレジエンシーかどこかに部屋を予約しているのは残念だ」

- b. Von **wer weiß** woher kehrte klumpig-schwerfällig sein Verstand zurück – ein Wunder, das sich beinahe allmorgendlich vollzog. (Frankfurter Rundschau, 18. 10. 1997, S.6)

「どこからか彼の理性が固まってのろのろと戻ってきた – ほぼ毎朝行われる奇跡だ」

- c. Und fragt sich dann, ob er sich, wenn es anders nicht geht, nicht mit Gewalt ins Recht setzen könnte gegen das Unrecht, das ihm der liebe Gott oder sonst **wer weiß** wer angetan hat ; (Frey, Eleonore: Muster aus Hans. Graz, Österreich, 2009)

「そして彼は他に方法がない時に、神様か誰かが彼に与えた不正に

対して、暴力で自分を正当化していないかと自問した」

不定的用法に数えられる例は全用例のうち 1.8% であった。この用法の場合、*wer weiß* はどれも単独の疑問詞 (*wo, wohin, woher, wer, wessen, was*) を伴って使用されていた。なお以上の二つの用法は文学作品のコーパスにおいてより頻繁に観察された⁽⁷⁾。

以上の二つの用法で興味深いのは、*wer weiß* の統語的なステータスが大きく変化しているという点である。本来 *wer weiß* の後にあらわれる疑問詞は補文標識として *wer weiß* に従属しているはずであるが、これらの用法では、疑問詞に後続する形容詞・副詞もしくは疑問詞が主要部のようにになっている。例えば強調的用法の *wer weiß wie lange* では、本来節である *wer weiß (wie)* が意味的に副詞を修飾し、全体として副詞句となっている。不定的用法においても *wer weiß* が *irgendwo* の *irgend-* のように機能し、疑問詞を修飾して不定性の意を加える働きをして、全体として不定副詞を形成している⁽⁸⁾。

また同じ形式が強調的用法と不定的用法の両方に解釈される場合が見られた。これには上の (8c) と (9c) が当てはまる。そこでは *wer weiß* と「誰」を表す疑問詞 *wer* との結合がそれぞれ強調的と不定的に用いられている。このような解釈の揺れはさらに *wer weiß was* という結合で見られる。上の (8b) で見たように、この形式は多くの場合強調的に用いられるが、以下の例においては不定的な解釈が可能である。

- (10) „Ich habe Verständnis für kritische Stimmen, aber sonntagsmorgens machen die Leute doch sowieso **wer weiß** was. Was ihnen

(7) 両用法の合計は文学コーパスが 39 例、新聞コーパスが 11 例であった。文学コーパスの全用例数が若干上回っていることを考慮しても、両コーパスの用例数には三倍ほどの開きがある。これは文学コーパスで会話文が多く出現するため、両用法のような会話的とされる形式が出現しやすいのではないかと考えられる。

(8) 節がその機能を失い、他の要素の修飾要素として語彙化するこのプロセスがどのように生じたのかについては、今後の検討が必要である。

jetzt in Fulda geboten wird, ist nicht das Schlechteste.“ (Frankfurter Rundschau, 24. 05. 1997)

「批判的な声は理解できるが、日曜日のお昼は市民はいずれにせよ何かはするだろう。今フルダで市民に提供されることはそんなに悪いものではない」

この箇所はドイツで通常は許されていない店の日曜日営業を解禁にすることに對する、フルダ市長の発言である。ドイツにおいて日曜日に店を営業しない理由の一つには、買い物により休日をゆっくり過ごせないことを避けるというものがあるが、市長はこのような立場に對し、市民はいずれにしても何かするのだから、そこに買い物に加わっても悪くないのではないかと述べている。文脈から判断するに、この例の *wer weiß was* は不定的な解釈が妥当であろう⁽⁹⁾。

以上のような用法と並んで、さらに (11) のように *wer* が不定関係代名詞として使用された例も見られた。

(11) a. **Wer weiß**, daß der in Los Angeles und Berlin lebende Christoph M. Ohrt gar nicht schwindelfrei ist, wird sich wundern. (Berliner Morgenpost, 02. 10. 1998)

「ロサンゼルスとベルリンに暮らすクリストフ M. オールトが眩暈に悩まされることを知る者は驚くだろう」

(9) またインターネットの用例では、不定的用法で多く使用される *wer weiß wo* が、以下のように強調的に使用されている例も見出される：18 Miniaturen versammelt es, die alle von von [sic!] einer Familie handeln, die bereits **wer weiß wo** gewohnt hat, wie Osteroth erzählt: unter Brücken, auf dem Mond, in der Geige der Tante oder im Traum. 「それは 18 の小作品を集めたもので、それらはどれもオスターロートが語るころでは、橋の下、月の上、おばさんのバイオリンの中、または夢の中と、さまざまところに住んだことがある一家を扱っている」
<https://www.perlentaucher.de/buch/jutta-bauer-peter-stamm/warum-wir-vor-der-stadt-wohnen.html>, (2018 年 10 月 24 日閲覧)

同一の形式にこのように二つの解釈が生じてくるのは、*wer weiß* の解釈の多義性に起因するものと思われるが、詳細については今後検討したい。

- b. **Wer weiß**, daß Luther Thesen an eine Kirchentür geschlagen hat, erfährt hier auch nur, daß das 1517 in Wittenberg war. (Frankfurter Rundschau, 31. 05. 1997)

「ルターがテーゼを教会のドアに打ち付けたことを知る者は、ここでもそれが単に 1517 年, ヴィッテンベルクでの出来事であったことを知るのみである」

しかしこの用法は、これまで見てきた用法と直接関連するものではなく、不定関係文を形成する **wer** の用例と見なすべきものと思われる。

さらにコーパスの用例では本稿の主たる対象である、認識的用法が見られる。これについては次節で詳しく分析したい。この用法は全用例のうち 23.9% 見られた。ここでコーパスの用例の用法ごとの生起の割合をまとめると表 2 のようになる。

表 2 *wer weiß* の用法別の割合

用法	用例数
疑問	20 (2.4%)
修辞疑問・否定	540 (65.2%)
強調的	35 (4.2%)
不定的	15 (1.8%)
不定関係文	20 (2.4%)
認識的	198 (23.9%)
計	828 (100.0%)

3.3 認識的用法の分析

以上で確認したように、認識的用法は全用例の四分の一程度で見られ、かなり頻度の高い **wer weiß** の用法と言える。ここではまず認識的用法のコーパスの実例を挙げながら、他の用法と比較しつつ、この用法の特徴を検討してみたい。

- (12) a. Die Gegend oben ist herrlich. Ich hatte nie gedacht, dass es mich mal in den Norden verschlägt, vorher wollte ich immer in den Süden. **Wer weiß**, vielleicht wird das mein neues Zuhause. (Friedrich, Olaf: *Meine Dates, meine Frauen und ich ...* Föritz, 2006 [S.115])

「上の地方は素晴らしい。私は北へと向かうことはちっとも考えたことがなく、以前はいつも南に行きたいと思っていた。それはひょっとすると私の新しい故郷になるかもしれない」

- b. Im Durchschnitt wird alle 50 Millionen Jahre alles Leben auf der Erde vernichtet. Na ja, etwas überlebt immer. **Wer weiß**, nach dem nächsten Kometenabsturz kommen die Insekten ganz groß raus. (Wittelsbach, Klaus: *Marc Marée*. Föritz, 2003 [S.150])

「平均して 5000 万年ごとに地球の生命は滅びる。もちろんいつも何かは生き残るが。ひょっとすると次の彗星の墜落の後、昆虫がとて大きくなったりするかもしれない」

まずこれらの例を疑問用法や修辞疑問の用法と比較したときに見て取れる大きな違いとして、認知的用法には目的語や前置詞句、補文標識が現れず、*wer weiß* の結合で単独で生起することが挙げられる。そしてこの結合自体が、認知的な意味を担う形式となっているという特徴がある。なお修辞疑問の用法においても、以下のように *wer weiß* が単独で使われる場合がある。

- (13) a. Wenigstens befinden sich am Rüttelpult tatsächlich Blutspuren.«
»Von Marika?«, fragte Norma gespannt. »**Wer weiß?** Wir brauchen DNA zum Vergleich.« (Kronenberg, Susanne: *Rheingrund*. Meßkirch, 24. 03. 2011)

「『少なくともワイン台には実際に血痕がある』『マリカのでしょうか

か』ノルマは緊張して尋ねた。『どうかな？ 比較のため DNA が
必要だ』』

- b. Deinen Job als Leiter des Morddezernats im Landeskriminalamt hättest du aber auch ohne ihn bekommen. Da bin ich ganz sicher.« **Wer weiß**, Jedenfalls soll er sich nicht mehr einmischen.« (Vertacnik, Hans P.: Ultimo. Meßkirch, 25. 03. 2011)

『彼なしでも君は州犯罪局での殺人事件担当長としての仕事を得た
ろうね。私は確信しているよ』『それはどうかな。とにかく彼がも
う口を出さないようにしてくれ』』

このような用法と認識的用法の大きな相違は、認識的用法の場合、**wer weiß** が後続もしくは先行する話し手自身の発話もしくは文に関係するという点である。(13 a) の修辞疑問の **wer weiß** はノルマの質問に対しての応答であり、「マリカのものかどうか」という質問内容に対し「わからない」という返答をしている。また (13 b) では「君は彼なしでも仕事を得た」という対話相手の発言に対して「わからない」と返答している。これらの例では **wer weiß** が先行する対話相手の発話をスコープとしているという特徴がある。それに対し認識的用法では、**wer weiß** に後続または先行する同一の話し手による発話もしくは文が、**wer weiß** のスコープとなる。例えば (12 a) においては **wer weiß** のスコープは後続の「それが私の新しい故郷になる」という文内容であり、(12 b) では「彗星墜落後に昆虫がととも大きくなる」という文内容である。このように認識的用法は **wer weiß** が意味的に何をスコープとするかによって同定される。

次にこの認識的用法の **wer weiß** がどのような統語的位置に現れるかを見てみたい。**wer weiß** が最も多く現れるのは、定動詞の前の位置である文の前域の、さらに前の位置である。これはしばしば前前域 (Vorvorfeld) と呼ばれる位置であり、用例の 8 割以上で、**wer weiß** がこの位置に生起している。その

例が (14) である。

- (14) a. Im ersten Stock klemmt er einen Streichholzkopf in die Tür – **wer weiß**, vielleicht bewegt sich ja doch noch was. (Berliner Morgenpost, 31. 05. 1998)

「2階で彼はマッチの頭をドアに挟む – ひょっとすると何かが動くかもしれない」

- b. Fußballspielen können die beiden Teams aus dem Frankfurter Süden in jedem Fall – und **wer weiß**, vielleicht treten sie ja in der kommenden Saison in der Bezirksliga gegeneinander an (Frankfurter Rundschau, 26. 02. 1997)

「フランクフルト南部の両チームとも、とにかくともにサッカーはできる – そしてひょっとすると両者は来季に地域リーグで対戦するかもしれない」

また次のように **wer weiß** が後域に置かれたり、挿入的に使われたりする例も見られる。

- (15) a. Marlehn Thieme weiß sich dort schon angekommen. Und vielleicht kommen noch ein paar Leute nach, **wer weiß**. (Frankfurter Rundschau, 11. 03. 1997)

「マルレーン・ティーメはそこにもう到着している。そしてひょっとするとさらに数人遅れてくるかもしれない」

- b. Vielleicht lauert aber auch unter seinem Bett – **wer weiß** – ein Wolf? (Frankfurter Rundschau, 05. 07. 1997)

「ひょっとすると彼のベッドの下にも狼が潜んでいるかもしれない」

この用法の大きな特徴はまた、多くの場合、話法詞 *vielleicht* と共起すること

である⁽¹⁰⁾。*wer weiß* は多くの場合前前域に生起することから、認識的用法の *wer weiß* は、*wer weiß, vielleicht ...* という形式で出現することが多いことになる。このことから *wer weiß* は、文に認識的意味を付与するモダリティ表現と共に用いられて、認識的意味を補助する働きをしていると考えられる。しかし例はそれほど多くはないが、*wer weiß* が単独で認識的意味を表すこともある。以下がその例である (3 b, 12 b も参照)。

- (16) a. Was mich betrifft, so werde ich weitersuchen nach Geschichten, die mir erzählenswert erscheinen. Und wenn Ihr wollt, **wer weiß** ... lest oder hört Ihr bald wieder von mir. (Bhattacharyya, Barin : Das einsame Land. Föritz, 2001 [S.232])

「私に関しては、語るに値するような話をさらに探すつもりです。そして君たちが望むなら、ひょっとするとまたすぐに君たちは私からの便りを読んだり聞いたりするかもしれません」

- b. Und bestell unserem Sohn viele Grüße von seiner Mutter. Sag ihm aber nicht, dass er uns so sehr fehlt. **Wer weiß**, sonst bekommt er noch mehr Heimweh. (Kohnen, Hermann J. : Das Geheimnis der Reges Sancti. Föritz, 2003 [S.274])

「うちの息子に母からよろしくと伝えてください。でも彼に我々がとても寂しがっているとは言わないでください。ひょっとすると彼がいつそうホームシックになるかもしれないので」

以上から *wer weiß* は認識的意味を補助する働きを主としつつも、それ自体も認識的意味を獲得していると考えられることができる。

wer weiß が認識的意味で解釈されるときには、通常は *wer weiß* が単独で前前域や後域等に現れるが、さらに少数ながら *ob* を伴う場合にも、認識的用法

(10) *vielleicht* 以外の話法表現としては *womöglich, eventuell, es kann sein, gut möglich, möglicherweise* が確認できた。

法に近いものと解釈できる例がある。以下がその例である。

- (17) a. “Im Moment gibt’s keine Probleme”, sinniert er. “Aber **wer weiß**, ob der Vorstand nervös wird, wenn wir drei Mal hintereinander verlieren. Und das kann in der Bundesliga passieren. (Berliner Morgenpost, 05. 08. 1999)

『『今のところは問題ない』と彼は考える。『でも我々が3回続けて負けたら経営陣は苛立つかもわからない』』

- b. Zu verlieren hat der Neuling nichts mehr, dennoch ist der Ehrgeiz ungebrochen. “**Wer weiß** ob wir noch einmal so eine Chance bekommen”, sagt Koch. (Frankfurter Rundschau, 28. 01. 1997)

「その新人は失うものはもはや何もないが、野心は十分である。「もう一度そんなチャンスがあるかもわからない」とコッホは言う」

このような解釈が可能なのは *ob* の場合だけであり、他の疑問詞が補文標識となる場合には認識的な解釈が難しいようである。この点については次節でもう一度触れたい。

4. 認識的用法への拡大

以上のような *wer weiß* の認識的用法は、他の用法から派生してきたと考えられるが、どの用法がどのように拡張することにより、認識的意味が生じてきたのだろうか。以下ではこの問いを以上の分析で利用した共時的データに基づき考察してみたい。

この問いは文文化研究の観点からも興味深いものである。認識的モダリティへの発展は例えば Traugott (1989), Sweetser (1990), Bybee et al. (1994) などですべてこれまでしばしば取り上げられてきたが、そこで扱われたのは

主に英語の *must* やドイツ語の *müssen* に見られるような義務的モダリティから認識的モダリティへの発展であり、「知る」を表す動詞から認識的モダリティへの発展はこれまで注目されていない⁽¹¹⁾。しかしながらこの発展は通言語的にしばしば観察されるものである⁽¹²⁾。したがってドイツ語における認識的用法の発展の考察は、文法化研究にも新たな知見を加えることになる。

ではまず認識的用法に近い他の用法をさぐってみたい。上で見たように、認識的用法の *wer weiß* の統語的特徴は目的語や前置詞句や補文を伴わず生起することであった。この点で最も近いのは修辭疑問の *wer weiß* の単独用法である。これは上の (13) や以下の例に見られる。

- (18) a. »Ich bin mir nur nicht sicher, ob es tatsächlich nur ein Streit war, oder mehr.« Jenny seufzte. »**Wer weiß?** Warten wir mal ab, was du in ein paar Tagen darüber denkst, und amüsieren wir uns in der Zwischenzeit etwas ... « (Karnani, Fritjof: Notlandung. Meßkirch, 25. 03. 2011)

『私にはそれが単なる喧嘩だったのかそれ以上だったのかわからない』とジェニーはため息をついた。『わからないな。数日で君は何か思いつくか待ってみて、その間は何か楽しく過ごそう』

- b. „Was hast du vor?“ „**Wer weiß?**“, entgegnete Suse unentwegt kichernd und rechte keck ihre Stupsnase in die Luft. (Hartwig,

(11) 世界の言語の文法化の傾向をまとめた Heine/Kuteva (2002) においても、認識的モダリティへの起点として挙げられているのは義務的モダリティのみである。

(12) 例えば *wer weiß* に対応するフランス語の *Qui sait?* は *Ils vont divorcer, qui sait?* 「彼らは離婚するよ、ひょっとしたら」のように認識の意味で用いられることが辞書の例で確認できる。またイタリア語、スペイン語、ポルトガル語ではそれぞれ文法化がさらに進んで一語化した *chissà*, *quizá*, *quiza* (ラテン語の *qui sapit* 「誰が知る」に対応) という副詞があり、反語的もしくは認識の意味を有している。また以下で見るように日本語でも「知る」を表す動詞を含む「かもしれない」が認識的モダリティの表現となっている。さらに韓国語においても「知らない」を表す動詞 *모르다* が -*는지* (도) *모르다* という結合で「かもしれない」という認識的モダリティを表す。

Hansi : Suse an Bord. Föritz, 2002 [S.309])

『『何するつもり?』『しらない』ズーゼは頑固に笑みを浮かべて返答し、低い鼻を上に向けた』

このような場合、*wer weiß* は以上で触れたように、意味的には先行する対話相手の疑問や言明に対して、「わからない」という応答や判断を行う役割を果たしている。このような使用が何らかのプロセスを経て、次第に認識的用法へと拡大していくと考えられる。ではそのような拡大はどのようにして生じるのだろうか。この点を考える材料となるのが以下の用例である。

(19) a. Denn das “schöne Geschlecht” ist meist in der Überzahl. Aber **wer weiß?** Vielleicht verwandelt sich ja so mancher Frosch auf der Tanzfläche in einen Prinzen. (Berliner Morgenpost, 25. 06. 1999)

「というのもメスはたいてい優勢であるからだ。でもわからない。かなりの蛙がダンスフロアで王子に変化しているかもしれない」

b. „... Ich kann mir nicht vorstellen, dass Ihnen das weiterhelfen könnte.“ „Ich im Moment auch nicht, aber **wer weiß** ...“ (Schröder, Angelika : Mordsliebe. Meßkirch, 18. 04. 2011)

『『私はそれがあなたの助けとなるとは考えられません』『私も今は考えられませんが、わかりませんよ』』

(19 a) では書き手が自分の主張である最初の文の「メスはたいてい優勢である」に対して、*aber* とともに *wer weiß* を用いて「でもわからない」と判断を保留し、別の可能性があることを示唆している。(19 b) においても、「私も今は考えられない」という発言を *wer weiß* によって保留して他の可能性を示唆している。また (18) の例では *wer weiß* が受け答えの談話場面で用いられていたが、これらの例では先行する自分自身の発話に対して判断が行われてい

る。ここでは談話場面での使用が、さらにテキスト構成の場面に拡大されて使われていると言える。また (19 a) で興味深いのは、*wer weiß* が先行する文の判断を保留しているとも取れると同時に、認知的用法によく見られるように、後ろの *vielleicht* と共に、認知的意味を補助しているとも解釈できることである。修辞疑問と認知的用法の両者は、このようなコンテキストを通じて連続的につながっていると考えられる。(19) の例に見られる *wer weiß* による別の可能性の示唆は、以下の例に明示的に確認できる。

- (20) a. “Nun warten Sie doch erst mal ab. Ich weiß doch selbst noch gar nicht, was ich da eigentlich schreibe ...” “Sie schreiben über Deutschland ...” “**Wer weiß?** Mag sein, mag auch nicht sein. (Berliner Morgenpost, 16. 12. 1998)

「『少し待ってください。私自身もそこにいったい何を書いたのか知らないのです。』『あなたはドイツについて書いています。』『どうかな、そうかもしれないし、そうでないかもしれない』」

- b. Warum aber sollte sie das tun? Hat sie ihre Tat, ihr schlechtes Gewissen so bedrückt? **Wer weiß.** Schon möglich. (Emme, Pierre: Pastetenlust. Meßkirch, 14. 04. 2011)

「でもなぜ彼女はそれをしてしまったのだろう？ 彼女の行為、彼女の自責の念が彼女を押しつぶしてしまったのか？ わからないが、ありうることである」

(20 a) では「ドイツについて書いている」という主張に対し、「わからない」という判断ではなく、むしろ判断の保留が行われている。そのことは後続する *Mag sein, mag auch nicht sein* により明示されている。また (20 b) においても「彼女の行為、彼女の自責の念が彼女を押しつぶしてしまったのではないか」という仮定に対し、「わからない」という判断というよりむしろ、判断の保留が行われ、そのことは *Schon möglich* という表現で明示されている。こ

のような表現の付加は (18) の用例では不可能である。これらの例に見て取れるように、*wer weiß* が出現するコンテキストによっては、ある事柄が「わからない」ということから、「その事柄が真である可能性もありうる」という含意が生じてくる。「わからない」と伝達する際に含まれる判断の保留ならびに可能性の指摘の解釈が、*vielleicht* のような認知的モダリティ表現とともに使用され強化されることで、*wer weiß* がしだいに認知的意味を有する表現へと変化していったと考えられる。

ここで日本語の認知的意味を有する表現である「かもしれない」という表現に注目してみたい。この表現にも「しれない」という理解にかかわる表現が含まれているが、日本語ではさらに「か・も」が加わっている。ここで「も」の機能は度外視するとすれば、「か」はドイツ語の *ob* にあたる補文標識である。「か」も *ob* も、出来事の成否の二者択一を表す標識である。すなわちこれらの標識の機能は「A のこともある (し、A でないこともある)」という、可能性の解釈を引き出すのに都合のよいものであると考えられる。すなわち日本語では「わからない」という出来事の可能性をも含意しうる表現に、さらに二者択一の標識をつけることで、認知的意味を表す表現を生み出していると言うことができる。(17) で見たように、ドイツ語でも *ob* が補文として現れる用例の中に、認知的用法と解釈できるものがあつたが、以上をふまえると、これは自然なことだと言えよう。

このように「わからない」という意味を表す表現が認知的意味の表現へと拡張して使用される点で、ドイツ語と日本語には共通点が見られる。そこで重要なのは、その背後に「わからない」に「可能性がある」という解釈を読み込んでいく共通の認知的基盤があることである。この拡張のプロセスは、ヒトの推論に関わる一定の認知的傾向に基づくものであり、それゆえに言語を超えて確認できるプロセスとなっていると言える。

5. おわりに

本稿では、これまで部分的には辞書等でも扱われてきたものの、その全体像については詳しく取り上げられてこなかった **wer weiß** という形式の諸用法を、主にコーパスの実例に基づいて考察し、その使用の実態を明らかにした。またこれまでほぼ注目されることのなかった認知的用法について考察を行い、その特徴を明らかにした。さらにこの用法の認知的意味が他の用法からどのように生じてきたかに関して、共時的なコーパスデータをもとに、考えられるプロセスを提示した。**wer weiß** に相当する表現が認知的モダリティを表すようになるという現象は通言語的に確認されるが、その背後には本稿で想定したような、言語を超えた我々のヒトとしての認知の傾向があると考えられる。

参考文献

- Biber, Douglas, et al. (1999) : *Longman Grammar of Spoken and Written English*. New York : Longman.
- Bußmann, Hadumod (Hrsg.) (1990) : *Lexikon der Sprachwissenschaft*. Stuttgart : Kröner.
- Bybee, Joan, et al. (1994) : *The Evolution of Grammar. Tense, Aspect, and Modality in the Languages of the World*. Chicago : The University of Chicago Press.
- Dudenredaktion (Hrsg.) (1999) : *Duden. Das große Wörterbuch der deutschen Sprache in zehn Bänden*. 3. Auflage. Band 10. Dudenverlag : Mannheim.
- Grimm, Jakob/Grimm, Wilhelm (1984) : *Deutsches Wörterbuch*. München : Deutscher Taschenbuch Verlag.
- Götz, Dieter (Hrsg.) (2015) : *Langenscheidt Großwörterbuch. Deutsch als Fremdsprache*. Neubearbeitung. Langenscheidt : München.
- Heine, Bernd/Kuteva, Tania (2002) : *World Lexicon of Grammaticalization*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Kempcke, Günter (Hrsg.) (2000) : *Wörterbuch Deutsch als Fremdsprache*. Berlin/New York : Gruyter.
- Klappenbach, Ruth/Steinitz, Wolfgang (Hrsg.) (1977) : *Wörterbuch der deut-*

- schen Gegenwartssprache 6. Band: väterlich-Zytologie*. erste Auflage. Berlin : Akademie-Verlag.
- Paul, Hermann (1992) : *Deutsches Wörterbuch*. 9. vollst. neu bearb. Auflage von Helmut Henne und Georg Objartel. Tübingen : Niemeyer.
- Schwitalla, Johannes (1984) : Textliche und kommunikative Funktionen rhetorischer Fragen. In : *Zeitschrift für Germanistische Linguistik* 12, 131-155.
- Sweetser, Eve Eliot (1990) : *From Etymology to Pragmatics. Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Traugott, Elizabeth C. (1989) : On the rise of epistemic meanings in English : An example of subjectification in semantic change. In : *Language* 65/1, 31-55.
- Wahrig, Gerhard (Hrsg.) (1997) : *Deutsches Wörterbuch*. Gütersloh : Bertelsmann.